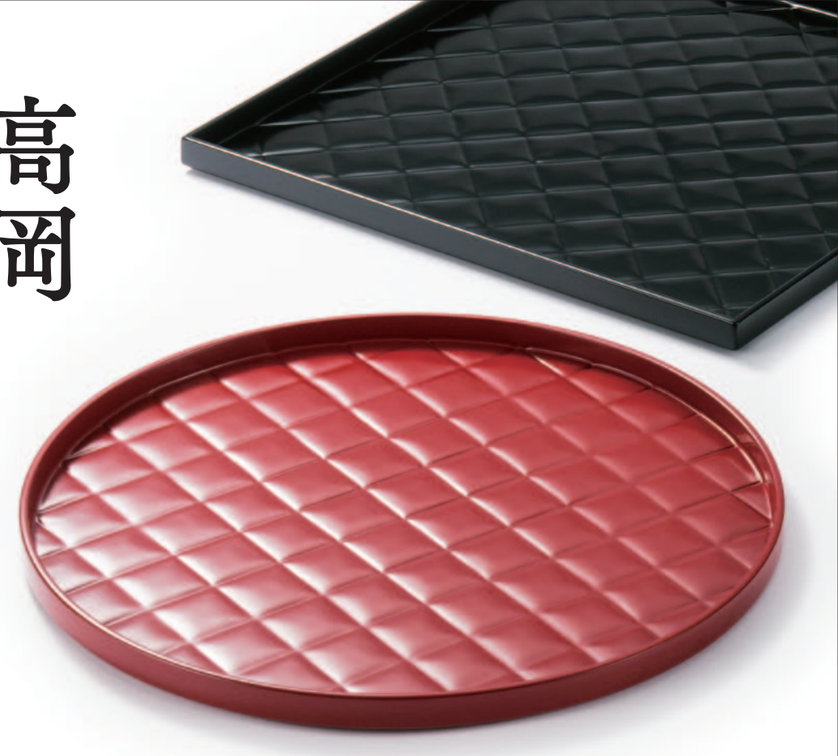
高岡クラフトコンペの変革と実り

30回を迎えた高岡クラフトコンペ

全国公募「工芸都市高岡クラフトコンペティション」が、2016年に30回を迎えた。コンペを開催することは、「ものづくり」のまち高岡の「ことづくり」であった。あらゆる「こと」が時代に応じて変化を求められるように、クラフトコンペも議論と変革を重ねてきた。そして、高岡とコンペを思う「ひと」たちが、新しい動きをつくりだしている。

コンテンポラリークラフト グランプリ
「硝子石」 佐々木 伸佳



ファクトリークラフト グランプリ
「QUILT」 望月未来×高岡漆器(株)

アートか、産業か。模索と決断

2010年、高岡クラフトコンペにひとつの変革があった。それまでひとつの基準で審査されていたグランプリと優秀賞が、「コンテンポラリークラフト」と「ファクトリークラフト」の二つの基準に分けられたのである。

クラフトコンペは、ものづくりのまち高岡発展の原動力となることをめざし、バブル景気が始まった1986年、産業界、商工会議所、行政が一体となって始めた全国公募展だが、産地への還元や応募人数の減少、市民への浸透といった課題があった。

これらの課題に対し、2012年にはクラフトの地産地消を目的としたイベント「高岡クラフト市場街」が、従来からあった工場見学ツアー「高岡クラフツーリズモ」などを加えてスタートした。そして、伝統産業振興を目的に「デザインマッチング事業」も始まったのである。

このアイデアを高岡の技でつくりたい

クラフトコンペの「デザインマッチング事業」は、高岡の伝統産業の技術を活かすデザイン画を全国から募集し、地元の企業が選んだ案を製作し、クラフトコンペに出品するというものだ。

このデザインマッチングに関心を持つたデザイナーがいた。愛知県でガラス系の工業デザインに携わる望月未来(みき)さんである。

望月さんは、2014年にブロンズ製の貯金箱のデザイン画を応募。竹中製作所が製作し、コンペで入選を果たした。

次は漆器で応募したいと考えた望月さんは、高岡漆器を調べ、「彫刻塗」という技法があることを知る。

「そこで、『鯛盆』と出会ったんです。うろこの部分の緻密さや鯛盆が作られた経緯に魅力を感じました」

鯛盆は、明治30(1897)年に納富介次郎(※のうとみかいじろう)がデザインした彫刻塗の盆で、高岡漆器を代表する商品として全国で人気を集めた。

望月さんは、彫刻塗のデザインを応募。それが、高岡漆器株式会社の國本耕太郎さんの目に留まった。「シンプルに見えて、難しい作品」と思ったが、木地、彫刻、塗りのそれぞれの職人に製作を依頼した。

その作品が、「QUILT(キルト)」。布地がふんわり盛り上がったキルトの質感を、彫刻で表現した盆である。この作品は、ファクトリークラフトのグランプリに輝いた。

「キルトの柔らかさを出せるかがポイントでした」と、國本さんは語る。高岡漆器の作品がグランプリを受賞するのは初めてのことで、職人たちのモチベーションもあがると喜んでいる。

望月さんにとってこの作品は、鯛盆へのオマージュ(敬意)。鯛盆のように、広く長く使ってもらえるものになればいいと語る。

高岡が「ひと」を生み出す大きな装置に

コンテンポラリークラフトのグランプリを受賞したガラス作家の佐々木伸佳さんは、「高岡クラフトコンペは、他の素材の作品と競い合えるところがいい」と話す。

「デザインマッチングには、ラブレターを送るような気持ちで出しています」と話す望月さん(左)と、「高岡の技術は、デザイナーの要望に応える力がある」と話す國本さん(右)。

漆器くにもとオンラインストア http://www.kunimoto-japan.com
「QUILT」をはじめ高岡のクラフト商品を紹介しています。

※納富介次郎と鯛盆(写真左、及び表紙)
鯛盆は、明治時代に富山県工芸学校(現・富山県立高岡工芸高等学校)の初代校長だった納富介次郎がデザインし、教頭の村上九郎作が製作した。高岡漆器の代表作として、現代に至るまで作り続けられてきた息の長いデザインである。

青井記念館美術館蔵

Interview

コンテンポラリークラフト グランプリ受賞
佐々木 伸佳さん

今回の作品は、硝子という素材や宙吹き(※)という技法でしか作り得ない、美しいと思えるものを、と思い制作しました。

模様と色、形の美しさとバランスには、いつもこだわって制作しています。そして苦労もさせられます。

同じ素材だけのコンペはあまり魅力を感じない自分にとって、「高岡クラフトコンペ」は、他素材の作品と競い合える、数少ない場だと思います。学べる事も断然多い貴重なコンペですね。

グランプリ受賞は、単純に嬉しいです。

入賞するためには実力は当然必要だとは思いますが、グランプリとなると、運やその他の要因も必要だということが実感できました。

※宙吹き
金属の吹き竿を使ってガラスを成形する吹きガラスのひとつ。中空で吹き上げていく技法。

大治将典さん（手工業デザイナー）
工芸都市高岡2016クラフトコンペティション審査員長

コンテンポラリークラフトに関しては、これまで「反復制作」できることを条件にしていたコンペが、今回から「一点もの」でもいいということになった。この点について、審査員長を務めた大治将典さんが、コメントしている。

「コンペの焦点が『もの』から『ひと』に移ってきたことだと私は解釈しています。『この人なら、また違った面白いものを作ってくれる』と」

近年はクラフトフェアやSNSなどで作家自身が使い手と直接コミュニケーションを取るなど、活動の範囲が広がっている。かつては作家への登竜門であったコンペは、今、どのような意義を持つのだろうか。

「私は、異能の才を持つ『ひと』を見つけることが、コンペの意義だと思っています」と、大治さんは話す。

例えば、器用じゃないけど、力を発揮する場を与えられれば、歴史を作れるような才能を持つ「ひと」。

「高岡クラフトコンペを、ひとを発見し、ものづくりを進める大きな装置にしたい。高岡で才能を開花させ、実を実らせて、また新たな種子が高岡に落ちるように」

「高岡は、どこへ向かうのか」を考える

これからのクラフトコンペについては、「海外のクラフトマンに開かれたコンペになりたいですね。日本で、ものづくりしたい人は、いっぱいいますよ」。海外でも、コンペをきっかけに、魅力あるものが生まれているという。

また、マッチング事業の結果など、コンペによって、どんな動きや商品ができたのかを明らかにすることが大事だと話す。「今、コンペ組織のあり方を考える時期にきています。まず、高岡はどこへ向かうのか、から考えることです」

高岡で工芸・クラフトの総合イベントを開催

高岡クラフトコンペの入賞・入選作品を展示する「高岡クラフト展」が毎年市内で開催されている。

2011年、クラフトコンペの今後に関する議論が行われた際、クラフト展をコアとする全体イベントを開催する案がまとまった。イベントのタイトルは、「高岡クラフト市場街」。2012年秋に、第1回が開催された。

『市場』というのは、ごった煮的なイメージの言葉。クラフトをキーワードにして、いろいろなものが重なりあっているんです」

ワーキングチームのリーダーだった松原博さん（当時、富山大学芸術文化学部教授）は語る。

工場を職人自ら案内する「高岡クラフツーリズモ」などのイベントに、地元作家の展示・販売イベントなど、それまで単独で開催していたイベントを結びつけ、「高岡クラフト市場街」という名前で相乗効果をねらったのである。結果、来場者数はクラフト展単体開催時の2・5倍を記録した。

「食」と「体験」が加わりバージョンアップを図る

「高岡クラフト市場街」の2年目は、「食」をキーワードに、クラフトを日常の生活により近くすることをめざした。クラフト作家の作品などを飲食店の器として使う「クラフトの台所」や、地場の食材を使った料理を高岡の食器で楽しむ期間限定キッチン「たかおかローカルキッチン」などを開催した。

3年目は、「体験」の要素を加えるなど、年々バージョンアップして継続している。

そして、今回は、これまで同じ頃に開催されていた「金屋町楽市 in さまのこ」を同時開催とし、三大クラフトイベントで高岡が大いにぎわった。

「金屋町楽市 in さまのこ」は、高岡鋳物発祥の地である金屋町一帯で行われるイベントで、千本格子（さまのこ）の家並みを舞台に工芸品を展示するほか、さまざまなイベントが開催される。

全体で4万人の集客があり、高岡の秋を彩るクラフトイベントは、ますます大きく成長している。

工芸都市高岡 2016 クラフト展 9/22（木・祝）-26（月） 大和高岡店 4 階催事場

高岡クラフト市場街2016 9/22（木・祝）-26（月） 高岡中心市街地 約30ヶ所

金屋町楽市 in さまのこ 9/24（土）-25（日） 金屋町石畳通り一帯

審査することの難しさ

今回、審査員を受けたのは、クラフトコンペへの恩返しの気持ちからです。自分たちの始まりは、ここからですから。

引き受けたからには、自分が本当にいいと思ったものを推して行こうと思っていました。審査は難しかったけど、楽しかったですね。

自分たちは、作り手だから他の人たちより厳しい目で審査していたかもしれません。クラフトコンペは、夢やあこがれであってほしいんですよ。

必死な思いでコンペ出品

クラフトコンペに出品したのは、独立したばかりの頃で、自分たちを知ってほしいという思いがあったからです。だから、必死でした。それで、初出品したのが「うもれぎ」です。

今回の審査で感じたのは、グランプリをねらうより、評価してほしいという作品が多いということです。それは、作品から伝わります。

受賞後のサポートも

自分たちの頃は、グランプリを受賞しても、すぐに仕事が来るわけでもなく、苦労しました。受賞後、ビジネスのサポートをするということも、コンペには必要かもしれません。

今はクラフトフェアもありますが、自分たちとしてはクラフトコンペが続いていってほしいと思います。

工芸都市高岡 2016 クラフトコンペティション 審査員

下尾和彦・下尾さおりさん

ユニット家具作家 SHIMOO DESIGN

1998クラフトコンペティション グランプリ「うもれぎ」
2001クラフトコンペティション グランプリ「MODERN」
その他、審査員賞、銀賞、奨励賞など

「MODERN」

松原 博さん（一般社団法人 CREP4 代表理事）
富山大学 芸術文化学部 客員教授
工芸都市高岡クラフトコンペティション審査員
（2010～2013）

高岡のまちのブランドイメージを上げる

「高岡クラフト市場街は、考え方としては成功していますが、課題も見え隠れしています」と、実行委員長の松原さんは語る。来場者が増え、売上も上がっているが、人の集積密度にバラつきがあったり、食べるところや休むところがまだまだ少ないなどである。

クラフト展を中心に考えて企画・実施されたクラフト市場街だが、目的が変化してきているのではと、松原さんは続ける。

「高岡のまちを元気にすること、ブランドイメージを上げていくことが大切。そうすることで、高岡へのリピーターも増えます」

一部の人だけが走り回っているのではなく、「産」「学」「官」「金」が連携してやっていくことが大事だと言う。「金」は、地域の金融機関のことである。

「まちの人たちの関わりも大切です。地域のなかで経済的な循環が起こり、エネルギーが高まることで、高岡のブランドイメージが高くなります」

30回を振り返り新たな試みも始まる

高岡市美術館では、30回記念展「工芸都市高岡クラフトコンペの30年」が開催された。

歴代のグランプリ作品をはじめ、コンペから生まれたクラフトや動きなどを展示。30回に至る時代の流れや、コンペに対する人々の思いが伝わる展示空間となっていた。

また、新たな試みとして、「高岡クラフトアーカイブス」が開催された。メイドイン高岡のクラフトを一堂に見ることができ、バイヤーとの商談も行われた。

このほか、過去に審査員長を務めた建築家の黒川雅之氏を招いた記念シンポジウムも開催された。

クラフトコンペが実らせたのは

これまで、クラフトコンペでグランプリを受賞する作品は、商品化が難しいものが多かった。

そこで入賞基準を変更し、さらにデザインマッチング事業を開始。2012年には、アルミ鋳物の「マネキン」がグランプリを受賞、そして今回は、漆器の「QUILT」がグランプリとなり、すでに販売が開始されている。

デザイナーの望月さんは、現代によみがえった彫刻塗をコンセプトに高岡漆器そのものをデザインし、今回の作品を「たくさんの人に喜んでもらいたい」と語る。

クラフトコンペは、「もの」と「ひと」をもたらしてくれる「こと」として、一つの結果を産地にもたらしたといえる。

一方で、「高岡クラフト市場街」は、高岡のまちにぎわいを生み、訪れた人々は、クラフトの様々な楽しみ方を知った。イベントは、今も成長しつづけている。

クラフトコンペの模索と決断は、確かな実りを結び始めた。それは、産業への貢献から、高岡のまちのブランディングに至ろうとしている。

高岡は、「クラフトコンペのまち」として、さらに独創の歩みを続けていく。コンペとは何か、クラフトとは何か。「デザイン工芸都市高岡」である限り、問い続けていくのである。

30回記念展「工芸都市高岡クラフトコンペの30年」
2016年6月17日（金）から26日（日）まで、高岡市美術館で開催。歴代のグランプリ作品やコンペから生まれた新しい動きや商品などを紹介した。（写真上）

高岡クラフトアーカイブス
メーカー、問屋、クラフト作家が出展し、見本市・直売会を開催。バイヤー対象の商談会も行われた。2016年9月23日（金）から25日（日）まで、大和高岡店特設会場。（写真下）

イベントの詳しい内容については、各サイトをご覧ください。

- 工芸都市高岡クラフトコンペティション　http://www.ccis-toyama.or.jp/takaoka/craft/
- 高岡クラフト市場街　http://ichibamachi.jp
- 金屋町楽市 in さまのこ　http://www.kanaya-rakuichi.jp/